

8 鴨川

かもがわ

知る

どんな川

鴨川は、「賀茂川」「加茂川」とも書き、京都の市街地を南北に貫流する川。上流の上賀茂(かみがも)一帯は古代、賀茂氏の本拠地で愛宕郡賀茂郷(あたぎ)があり、賀茂の地名が定着して川名もこれに由来すると考えられます。

北区雲ヶ畑(くもがはた)の棧敷嶽(さじきがだけ)山中に源を発し、北区上賀茂(かみがも)で京都盆地に入り、出町附近(ひまち)で北東から流れてくる高野川(たかのがわ)と合流。南方に流路を変え、四条附近(よじ)で白川(しろがわ)、最下流部(さいげりぶ)で堀川(ほりがわ)・西高瀬川(せいこうせ)を合わせて、伏見区(ふし見)下鳥羽(しもとり)下向島町(しもむかしまち)で桂川(かえがわ)に合流します。長さ約二十三キロメートル。

鴨川の歴史

鴨川は、しばしば洪水(こうずい)を起こす川でした。院政(いんせい)を開始し、その権力(けんりき)を思うままにした白河法皇(しろがわ)でさえ、「賀茂河(かまがも)の水・双六(すじろく)の賽(さい)・山法師(やまぼうし)、是(こ)ぞわが心(こころ)にかなはぬもの」(『平家物語(へいけものがたり)』)と、天下(てんか)三不如意(さんふじよ)の第一(だいいち)に鴨川(かむがわ)の水(みづ)をあげたほどです。

鴨川(かむがわ)の洪水(こうずい)対策(たいさく)として、堤(つと)を修理(しゅうり)するため天長元(てんぢょうげん)八二四(はにじよ)年に設置(ていし)されたのが防鴨河使(ぼうかむがわがし)ですが、成果(せいこく)はあまりなかったようです。



「京都明細大絵図」(京都市歴史資料館蔵)に見られる寛文新堤。鴨川に架かるのは四条の仮橋。

寛仁元(かんじんげん)一〇一七(じよ)年の洪水(こうずい)では、富小路(とみこうじ)以東(よ以东)が海(うみ)のようになり、悲田院(ひでんいん)(貧窮者(ひんきゆうしや)や孤児(こじ)の救済(きゆうさい)施設(しせつ))の病人(びやうにん)三百(さんひやく)人が流(なが)されました。

慶長十四(けicho)一六〇九(じよ)年(ねん)、豊臣秀頼(とよひで)は東山(とうざん)の大仏殿(だいはつでん)再建(さいけん)工(こう)事を起(おこ)しました。その建築資材(けんちくさいざい)は淀川(よどがわ)をさかのぼり鳥羽(とりは)へ着(つ)き、そこから陸路(りくろ)を京都(きよと)へ運(は)ねましたが、巨大(こっけい)な木(き)は陸揚(りくじやう)げ後(ご)の輸送(ゆそう)が困難(くわんなん)でした。これを見た角倉素庵(かくらそあん)は父(ちち)了(りよ)以(い)と相談(さうだん)し、鴨川(かむがわ)に筏(いかた)を流(なが)したり川船(かわふね)を通(と)わせることができるように整備(せいび)する工(こう)事に着(つ)手(て)。慶長十五(けicho)一六一〇(じよ)年(ねん)に完成(わんせい)させました。

この鴨川運河(かむがわえんが)疏通(すうつう)により物資(ぶつし)の輸送(ゆそう)は円滑(えんかつ)に行(い)われようになりました。この成功(せいこう)にはげまされ、了(りよ)以(い)は高瀬川(たかひら)の開鑿(かいさく)を続(つづ)けて行(い)ったのです。

寛文九(かんぶん)一六六九(じよ)年(ねん)鴨川(かむがわ)両岸(りやうがわ)に新(あたら)しい石堤(いしづと)の築造(ちくぞう)が開始(かいし)され、翌年(ご)完成(わんせい)しました。この石垣(いしゐき)を寛文新堤(かんぶんしんづと)といいます。この護岸工(ごがんこう)事が行(い)われ

鴨川は左右に河原が広がる自然河川でしたが、堤により河原が市街地化されて、現在の鴨川景観の基礎が作られました。

明治二十三（一八九〇）年、琵琶湖疏水が市内に達して鴨川と合流したのにもない、それを利用した水路として鴨川運河の開鑿工事がなされました。同二十七年完成し、京都伏見間の水上動脈となりました。これは第二高瀬川ともいべきもので、琵琶湖疏水と淀川を直結し、大型生活物資輸送に役立てられました。途中八か所に閘門こうもんを設け、翌二十八年には、伏見インクライン（傾斜鉄道）が完成しました。



昭和10年洪水時の鴨川。三条大橋下流から北を望む。

昭和十（一九三五）年六月二十九日、豪雨で京都市内の河川が氾濫し、鴨川でも三条・五条大橋などほぼ九割の橋が流失し、北大路橋・賀茂大橋・七条大橋のみが残りました。この洪水は死傷者八十三名を数える惨事となりました。今は散策や夕涼みの憩いの場所になった鴨川ですが、水との長い戦いの歴史がありました。

鴨川付け替え説

現在高野川たかのがわと鴨（賀茂）川とは今出川出町附近で合流してY字形になっています。しかし、京都盆地が東北に高く西南に低いという地形を考えると人為的に流路を変更したのではないかという推測がなされ、そのような大規模な工事をするのだったら、造都時をおいてほかにないと考えられてきまし

た。現在堀川として京都のほぼ中央を流れている川が、旧鴨川の本流で、これが都城建設過程で高野川に合流させられ、鴨川になったとするものです。

平安京の真ん中を流れる河川を京外に付け替えるのは、自然の流れに逆らったものです。ですからこうしてできた鴨川には洪水被害が多かったと考えられたわけです。しかし今では、早くから流路は現状と大差なかったとみなされ、付け替え説は否定されています。

歩く／見る

鴨川の源流 北区雲ヶ畑町棧敷嶽附近の山中



雲ヶ畑の鴨川最上流

鴨川の源流は、京都府北区雲ヶ畑くもがはたの棧敷嶽さじかたけ附近に発します。出町附近の高野川との合流点から水源までの距離は約十三キロメートルです。水源近くまで行くには、京都バス「雲ヶ畑岩屋橋」行き（出町柳発）があります。

鴨川と高野川の合流地点

鴨（賀茂）川・高野川の合流するY字形の三角形の地には下鴨神社の糺ただすの森の緑があり、両川とともに美しい景観をつくっています。この場所を俗に「剣先けんさき」というのは、二つ



山紫水明処 上京区東三本木通丸太町上る
丸太町橋に立って、西北の鴨川畔に眼をやると藁屋根で
入母屋造の建物があります。これが山紫水明処で、文化文政
時代の儒学者頼山陽（一七八〇〜一八三二）の晩年の居宅で
あつた水西荘に附属した一棟の書齋
です。

「山は紫にして水明し」という
名前は、京都の特質というべき、鴨
川と東山の美しさを言い表している
言葉で、現在も京都の形容として盛
んに用いられる言葉です。この地が



賀茂川(左)と高野川(右)の合流点。
中央が紘の森

の川の間Y字を刀の先端に見
たてたからです。

その合流点より上流を「賀茂
川」、下流を「鴨川」と現在は
表記しています。歴史的にはそ
ういう区別はみられず、上流を
「鴨川」、下流を「賀茂川」「加
茂川」と書く例はたくさんあり
ます。

桂川との合流点

高野川と合流した後は、南方に流路を変え、四条附近で白
川、最下流部で堀川・西高瀬川を合わせて、伏見区下鳥羽下
向島町で桂川に合流します。

鴨川を目の前にし、東山を遠望する場所であることから名付
けられました。国指定史跡として保存され、限定公開されて
います。ここで『日本外史』等が書かれました。

目疾地蔵 東山区四条通大和大路東入

四条通、鴨川東にある仲源寺の本尊。寺伝によれば、安貞
二（一一二八）年八月の洪水の際、防鴨河使の勢多為兼が地
蔵菩薩のお告げで治水に成功したので、これを安置して雨止
地蔵と名付けました。のちに転じて目疾地蔵になり、眼病を
癒す地蔵尊として信仰されたといえます。「畔の地蔵」とも
いわれ、四条橋の東北辺りにありましたが、秀吉の命令で現
在地に移ったといえます。